貴族

上

一島本久恵

貴族

上

島本久恵

筑摩書房

貴族　上
昭和四十八年七月三十日発行
著者島本久恵
発行者井上達三
発行所筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京三九一ノ七六五一振替東京四一三三
印刷所明和印刷
製本所大口製本
©昭和四十八年島本久恵
〇〇九三ノ八〇〇九ノ四六〇四

貴

族

（上）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

京都上賀茂の社家の出である小池祥敬は、その国学の素養から明治政府最初の内閣である太政官に出仕、明治四年官制改革で正院、左院、右院の三院制度となると共に正院大手記にあげられ、端正の人格と柔和の外貌と時に冷徹の一面も出るところから司法内部に重んぜられ、一方の実力者として、部外にもいつか知られる存在となった。

改革前出仕はじめの時分には弾正台刑部省で、名の通りの役所のきびしい役柄にあった。もともと国学も律令の方面に身を入れて来た彼だったので、新政府のこの任用に異議を持つ者は京方にはなかった。しかし現在の正院大手記の位置では新帝都の東京でなのだ、何故か人が山岡鉄太郎の名を蔭で言った。

尤も旧幕臣の山岡と京の長袖の小池が、どんな出会いで識り合う間となったのであるかそれの言える者はなかった。ただ因縁は分からないながらあの男にはあの山岡がと、誰でも思う。やはり山岡という人物の遊撃性が先きにあって、それが想像を引き出すことでもあるのだったろうが、何か腹の中に似たもののある二人なのだと気がつくとすれば、機会あってそれが相触れてと見るのが、最も自然であったのではないか。

とにかく外見では彼は順風に乗ったものに見え、現状に不満を持っていようなどとは思えぬのであ

ったけれど、彼自身の中では実は少こしの安心もなかった。

彼はどうも、この外郭では出来たか出来つつあるように見える維新なるものが、実質では古く、疑いの深いものに思える。あらためねばならない大きな狂いを根本に持つのが見える。安心は到底得られないのであった。

さてその疑い狂いと見えるものであるが、官の役人である彼では、見えているそれの根本に眼を注ぐのに、出て来てさえぎるものがある。「困る、その眼はふさいでくれ」と大きく前に出るのである。そう出られても彼はその眼をふさがれないのであるが、そしてその眼はよりはっきりと開くことこそが実なのであるが、それこそが本心でのつとめであるのだが——。

そして、ひそかに、ではない、もうどうしても本心をひらいて出たい、出ねばいられぬところに来ていた。一日じっとしていれば一日だけ批判が高まる、そうしている自分の不実への批判であった。

尤も彼はふるさとの上賀茂で、律令の研究にただ一学徒の気持ちでいた時、すでにその新政の矛盾を見ていた。それは一片の布令なのであったが、彼はその布令が命じて来たものに従えないばかりか、これはとひどい衝撃で、前途に闇がたちこめるのを感じた。で、ここでもそれをも一度出して来て、それから眺めなくてはならぬが、あまりにおろかで興ざめのほかない。それ故わざとではあるけれど、事の数日後のところにかえり、下加茂上賀茂をつなぐあの長堤での、或る僧と或る男（僧は高徳のきこえ高かった老僧、男は大蔵流の一狂言師）との出会いにより、むしろ大方をだんまりでのとりやりにおいて見ることにしたい。

狂言師は、祥敬が生まれた家に、家来といって代々出入りして来ている者で、本業は農、社家方で魚の用があれば、山を若狭に越え、北の海の生魚を浜で値をつけ手に入れて来て納める。それでその時は魚屋であった。名は庄作、一人三業を兼ねて無理がなく、大きな体でいつも何やら悠揚としていた。とりわけ中京辺へ二つ三つの用事をかねて出て、ついでに祥敬から頼まれていた買物を三条から北の寺町で済まし、好きな古絵図を好きな古書店によって、額に入った一枚一枚をゆっくり鑑賞させてもらって来た今日などは、五十丁の帰りの堤が一倍楽しく、ゆらりゆらり、五十丁が、五丁十丁延びてもかまわぬ心持ちだった。

堤は、勅使参向のため築き成されたつくり道で、右は賀茂川を見下ろすと共に、左は京の北郊の、飛び飛びに、寺や人家が見えるところ、鞍馬ぐち、新町ぐちまた室町がしらなどいう辺で、そしてそれがやっぱり低く、そちらからは程よく見上げる高さの堤で、今をいにしえに返すかのような並み松のたたずまいからも一層舞台の上の気がし、その上、日も春の日で、それがもう夕べの和みに近づくのである。

と、庄作のよく見える眼が何かをみつけた、夕がすみの立ちこめる遠くの遠くにである。

こちらがそちらへ行くように、そちらはこちらへやって来る、人影、はじめは一点の小ささだったが、それでもう庄作は感覚的にその人を知った。ただびととちがう、そして一気に親愛と尊信が融け合い、彼の眼はしょぼつき唇辺がゆるむ。それはもうその間にも縮まる距離が、うれしいけれど惜しいぐらいで、しかし待たない、老僧はもう杖を突き、足には草鞋、他行の精悍な姿であらわれて来、

そちらこちら同時に声、
「律師さま」
と庄作、
「お前や思た」
と老僧。庄作が、昨夜の雨をまだ持っている地びたで手の物を下ろすことができず、提げたままで頭を下げるのへにこやかに、
「お前は戻り、わしは往くところじゃ、こないだはごくろうさんやった」
「へへえ、夜分遅うにあのようなことで」
「いやいや、よう来とおくれた、お客人はごきげんよう居て下されてる、ようお仕えいたしますとな、祥敬さんによう申しとおくれ」
「は、はいもうそれは、お送り申して帰りますと、御前ほっとなされましたお顔でうなずかれまして、それからまた出てつくづく灰を見ておられました、律師さまありがとうございます」
「ほう、灰を見ていられたかいな、いやわしもいつ灰を見んならんや知れん、まあそこまでは狂わんように止めたいもんやが、まあよう見てよや、そいで今日は何処行きやった」
「へえ、綾小路、それから高辻、ためときました用を一遍に、それより律師さま、あなたこそいまからどちらへ、お供もなしに」
「わしかいな、わしは醍醐や」
「何ぞ急に」

「いや、急といえばこれも急の内やろ、笑ろとおくれ、わし、ここ何年も醍醐のあの枝垂れが咲くの見て来ていでなあ、一つ今年は思てたらゆんべの雨やろ、咲くな、思たら寝てられいでなあ、朝早うにも出たかったけど、人が来てしもて観音さん描いてくれ言うて坐られてしもて、とうとう一日放免にならなんでなあ、これから行くのや」

「はあ、それは、今からでは日の岡よりこっちで暮れてしまいましょがなあ、ご風流に夜道かけられて」

「小僧、一人留守番で、おまけに怖がりや、けど茶所におばあいられる、見てやって下さろ」

「へえへえ、弱虫に見えてはるけど大円小ぼんさん心配要りませんわ、そんなら律師さま、枝垂れのええとこご覧になって、お帰りは昼の間にどうぞ、おかぜ召しませんように」

西賀茂神光院の阿閦(あしゅく)律師と庄作はこのようにして別れ、堤の上をどちらもが小さくなって行ったことだった。

その翌日庄作はまるで憑きものがした男のように、昨日に変わるふらふら足で川を西賀茂へ越え、菜の花が黄にふくれ出した畑中みちを行き、神光院に、心から人目を憚る入りようをした。背中に祥敬の二女の五つになる幽里という子を負うて居、これがすっかり眠りこけていた。川原で遊びすぎたのであった。「おじ、おじ」といって幽里は実に彼を好いてくれた。いつでも待っていて軽袗(かるさん)のわきにしがみつき、「川原に行こ、川原で遊ぼ」と川原につれて行くことをせがみ、「いけません、日に焼けます」と言っては見るが、可愛ゆさについ負けていうことをきかされてしまう。「幽里お控え、お

じは幽里のお相手してる暇ございません」おたたさんのお叱りもまあそんなことでついもう笑ってしまわれ、「そんならちょっとでございますえ、庄作さん、いうようにさしてたらこのお人、きりございません、川の淵のこわあいとこのぞかして、もう去の言わすようにして下さいや」

そのようなことで川原につれて下りたのだったが、河原はひろく、水は幾条にもわかれていて、その流れのどれにも橋は渡してなく、小板一枚あればと思う細ながれや、大きな歩幅で七つも八つも行かねばとどかぬ大流れや、実に流れのいろいろが友禅の模様のようにうねっていて、青石や黒石やまたさざれ石になったのがぎっしりと敷きつまっている川底を透かす弥生月の陽光に、石の蔭を出た小さな、幽里の小指ぐらいの鮴がすすっすすっと影を曳いて走る。幽里がまたそれを追うので足がきまらず、流れに頭の出ている石から石を伝う始末で、庄作の鷹揚では直き手にあまり参ってしまう。

「これは、これはひどい、姫さん去にましょ、姫さんのように飛び歩かれてはついて行けません、転けて痛々しやしたかて、はまっておべべ濡らしやしたかて、こいではおじもう構えません、姫さんらしいにちっとはちゃんとしてやさんかいな」

「ちょっと、おじ」

流れの石の上で急に足を揃えて止まって、

「姫さんて何や、名あ幽里やのになんで幽里申しません」

「いいえ、姫さん申しますです、お主筋の大切のお家のお子でおなごはんなら、家来のおじからは姫さんどすのや」

「お主筋いうた、お主筋て何や、家来て何や」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「さあもう宜ろしが、お主はお主、誰れにでもきまってますが」
「そんなら幽里とこにもお主があるか、うちのお主誰れや」
「賀茂のお宮、別雷（わけいかずち）の神、こらようおぼえときやさないかん」
「天子さまは」
「あ、天子さま、こら別ですわ、天子さまは日本の親のようなお方でお主、日本中がこの親の子で臣、家来どすのや」
「そしたらおじはお主お主ばっかり、そいで家来か、家来には家来ないのか」
「家来にも家来あることございます」
「おじの家来誰れや」
「やめましょ、姫さん無茶苦茶言いやす」
「日本中が天子さまの子やったら、鰍もそやろか、鰍家来あるか」
「ほほっ」吸い込むような笑い、
「こら奇抜や、おじ寡聞にして鰍の家来聞いとりません、何時ぞよう尋ねときます」
いつでもこんな難問答、それに陽がすっとかげる、かぜを引かせてしまいそうだった。
「さあ、かぜ引く、去（い）にましょ、おいでやす」
かがんで背を向け、負うて帰ろうとする。
「いやや去（い）なへん、去ぬのならおじ一人去に、幽里川原好きやここにいるのや」
「いきません、川原にいるて、人が川原もんや言います」

「川原もん、川原もんて何や」
「もうよろし、姫さん知っとお居いで差支えしません、さあ負いましょ、おいでやす」
「いや、負われへん、けど負われたら川原もん何や話すか」
「さあ難かしけど言うたげましょなあ」
とうとうそれで幽里も負ぶさる。そして庄作が二あし三あし歩いたと思うと、小さい頬べたがぴったり背中についたのが分かる。
「ああ罪がない、こら眠らはるわ」
果してしつこい聴きせびりが止み、背中はいよいよぬくもるのだった。
でもそのとろっとしたのから目が明いた時、というのは、いい気持ちにあたたまってもたれていた胸が、ふっと何やら圧されて苦しくなったからで、と幽里は自分が片手負いにされて居、そして庄作は外ずした片手で片手拝みに前方へ向かい、口でも何やら唱えている。きき分けられる声ではない、ただ口の中の低いものだが、おたたさんが般若心経といわれたそれとは幽里の感じるもので、「おじ」と声を出さないのも、息まで詰めて窺うのも、何かそれが庄作の密事の感じに取れたからだった。
しかし庄作には分かった、背中がふっと重さを減じ、眠りこけた最前(さいぜん)とは違っている。拝んだ手を戻してしゃんとすると一つ揺すり上げ背中へ言った。
「姫さん、ようねんねしやしたことなあ、おめめさめてここ川原やございませんなあ、分かりますかここ何処や、まだ一遍も来やしたことない、なあ、遠おい余所の、へえもう見やす通りのまんまんさんどす、おじは姫さんがねんねのひまに思たんやったけど、めめ醒めたんなら、それ、掌々合わして、

まんまんさん、あん、そうそう、そうなあ、ようよう拝みやすえ、何処のまんまんさんやろと、まんまんさんの前ではお掌々合わすのどしたえなあ」

言われる通り幽里は掌を合わせ、しかし背中だからおじには見えない、顔は上げていて眼もつねより強くあいて、まんまんさんの奥をじっと見た。お堂は暗い、そして格子の外から眼を中へ忍ばすのだから、尚更見えはしないのだったが、仏さまのお像がぼんやりとだが三つ見え、その右端しのお顔だけが、何故かおぼえのあるお顔の気がした。

それなのに「おじ、あのお顔」ときく筈をきかない。何か異な、密事の気配が知られたからで、おじはおじでこの手に合わない聴きほじり姫がこの場に限りこれなのがぐっとこたえ、急に小さく狼狽をおぼえて、

「姫さん、ようお拝みた、まんまんさんも姫さん来とおくれて、なんぼ嬉しい思われるやろ、よかったよかった、けど姫さん、おじが頼みます、今日ここに来てこのまんまんさん拝んだこと、誰にも誰にも言いやすなえ、それ言えんわけは大きおなりたら分かる時来ます、な、おたたさんにもおでいさんにも黙ってとくれやすえ、な、それ分かるとおじ叱られるし、えらいことになりますのどすわ、姫さん頼みます、賢いお子や、分かって下さい」

「幽里、言わへん、誰れにも誰れにも黙ってたげる、けどおじ、黙ってるさかいきっと言うて、いつぞ、きっとえ、ぎりぎっちゃんぼえ」

「へ、大きに大きに、さ姫さん手々出しとおくれやす、本気でぎりぎっちゃんぼ、さ、姫さんの小っさいお手々と、おじのこの大きな手々と」

ひそひそとそこで誓約、
——ぎりぎっちゃんぼ、銀のかんざし十三本、蔵三つ、家三つ——
「さ、も一つ、輪あも吹きましょ、おや指と人さし指のこの小っさい輪、どっちでも約束破ったら、破った方が牛に乗ってこの輪あの中くぐるのですなあ、さあ」
頬をいっぱいに息をためて、代る代る吹き合う。いつだってお相手で無理を押しつけられてするこの密々の誓約が、今日ばかりは変に真剣で、殊に庄作は笑いごとでなどなかったのだった。
「きっとえ、そんならもう去の、ここ何や暗い」
遠いように庭障子の明く音がし、茶所のおばあさまが子供の声で出られたのが分かる。揺すり上げて幽里を負い直し、角のすり減った木の段々を下りる。池をまわって近づきながら、
「お制作中や思いまして、お声もせずにお詣りいたしました、おばあさまご機嫌よろしゅうございます」
「おうおう、あんたやったかいな、あんたもいつもご壮健で、ほう可愛らしい、何処のお子え」
「へえ、主人の二番目さんでございます、さ、姫さんおじぎを、蓮月のおばあさまどす」
いかん、名を言ってしまった、それではここが何処かも知れるのだ——庄作は目をむく。背中で幽里は言われた通りおじぎ、黙ったままだが庄作とは反対に眼をきらきらさせ、それはもうこの円頂粗服の、手も汚ごれたままの老女を、子供ながら異常な注意でながめるのだった。
「はつめいらしい、こら好えお子やわ、祥敬さんさぞお可愛ゆうておいやすことやろ、上はお世継ぎさんかえ」

「いえ、初のお方も男さんやございませんので、それにそちらさんはもうあなた九つさんで、へえ五年も間あ空いて、このお方どして」
「九つ、そらもうしっかりしとお居やろ、ご教育もお進みやろ、ごきょうだいお名は何とえ」
「はい、上ははつさん、このお方はゆりさん申されます、はつは、始めの初やございません、発するの発の字、これから変わる日本では女も従でいてはいかん、男とならんで働かいではと、それでの発でございましたので」
「おうおう祥敬さんらしい、そしてそのお発さん、そういうお子かえ」
「へえへえもうそら、お頭の良えこと申しましたら、そらちょっと小っちゃいさんのやんちゃくちゃはんとは違うてられて、怖いぐらいでいられましたです、それで何やお考えがありましたようで関東の伯母御さまへお預けやして、六つぐらいからあちらで大きなってられます」
「関東の伯母御さんとは田安さんの老女でいられる静さんやろな、武門の御殿の厳格なしつけを思わしゃってやわいな、静さんの凛としたお人柄も見上げたものやし」
と、背中の幽里がひとりで言う、
「蓮月のおばあさま、高畠の式部おばあさま、歌のおともだち、お仲良し」
おたたさんからの口移しで、唄のようにおぼえてしまっているのであった。
「おうまあ、よう知っとおいや、可愛らしことなあ」
ほめられて、もっとほめられたくなった幽里、
「おばあさま」

お堂の方を指して、
「幽里まんまんさんよう拝みました、家のまんまんさんいられました」
庄作はあわてた、
「何どす姫さん、ぎりぎっちゃんぼ忘れやしたか」
幽里きょとんとして、それから思い出す。
「ああ知らん、知らんのやった」
蓮月は庄作をおさえて、
「ええがな、ええがな、庄作さん、何か、そうすると」
仕方がなく、
「へ、その、何で、ございまして」
「分かったわいな、律師が昨日出がけに言われた、醍醐から戻ったら拝ますお方あると、そのお方やねな、分かった分かった、何やおかしい世になりました、そいで——、いやそら庄作さんご苦労でございました、しかしここなら心配ない」
「ありがとうございます」
「幽里さんやったな、このお子賢い、いまは出たけど相手知ってはる、心配ないわいな、あの、幽里さんえ、そのいまおばあに言わしゃったこと、おばあだけえな、もうお言やへんなあ」
「知らん知らん、言わしません」
「おばあにも約束しとおくれる」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com